

「神の存在を支持する道徳的議論－哲学的再考察」

デイビッド・カールソン（清平神学大学院教授、韓国）

序文

神の存在ないしは不在は大変長い期間にわたり論争のテーマであった。初期のキリスト教教父は神の存在を前提に、その中核的確信の周辺で自らの神学を展開していった。彼らにとって、神の存在は決して問題にはならなかった。神の存在証明をつくりあげた人々は決して自分たちの議論が論破されることは想定していなかった。論理的証明は、神を信じないつまり無神論者を説得するためのものではなかった。その時代、無神論者はほとんどいなかった。初期の議論は既に神を信じている人に対して、信仰の理性的な根拠を提供するためのものだった。これは「理解を追求する信仰」(fides quaerens intellectum)といわれたものである。(1) その初期の議論の一つ、本体論では、神の概念に関心を集中し、その概念から導き出される意味を展開していくものだった。神の存在に関する初期の議論のほとんどは、理性的な性格のもので、知識人に向けて語られることが想定されたものだった。そういうわけで、それだけを見れば、神の存在証明といったものとは到底考えられないものだった。個別の議論は一定の不十分さを伴うものであった。

様々な神の存在「証明」の中で、おそらく最も有名で最も議論されたのが、トマス・アクイナスの「五つの証明」だ。(2) 本体論的議論とは対照的に、アクイナスの証明は「私たちを取り巻く世界のある普遍的な特徴から出発し、神と呼ばれる絶対的実在がなければ、この特定の性格をもつ世界はあり得ないはずだと論じる」ものだ。(3) アクイナスの五つの証明は 1) (物体の) 動作の事実から始原作動者を 2) 原因から第一原因を 3) 偶然的存在から必然的存在を 4) 価値の程度から絶対的価値を 5) 自然の合目的性から神聖なる設計者を一論じるものだ。これらすべての証明は、その強さと弱点を含めて、ある期間論じられた。五番目の自然の合目的性の証拠から神聖なる設計者を論ずる証明は、現代において新たな命を与えられ、現代科学とりわけ物理学と生物学の新展開に伴い、新たな説得力を得て、議論に影響を与えるようになった。様々な神の存在「証明」にルネサンスが及ぼした影響を検討することから始めよう。

ルネサンスが全てを変えた

ルネサンスの時代から始まったが、「近代性の酸」は見えざる神へのいかなる「非理性的」(つまり篤実な) 信仰の全てを浸食し、事実上あらゆる人間の努力を、赦しのない理性と実験と経験の法廷に従わせた。この傾向は極端ないわゆる「カイン的」人生観に行き着くことになった。この人生観はすべての物事をただ外的な視点のみから認識し解釈するもので、とりわけカール・マルクスの無神論的唯物哲学である、弁証法的唯物論として結実し

た。(4) この純然たる世俗主義的世界観は、20世紀から21世紀に移ってとみに、重要な影響力を発揮し続けている。21世紀のリベラリズムの流れは、この見解を促進するものである。

とはいうものの、21世紀に入って、神の存在の問題がかつてない強烈さで再び浮上している。今日、社会、特に欧米の社会が経験している「文化戦争」のさなかにあつて、神の存在あるいは不在の問題が、明確で非常な緊急性を帯びている。「伝統的な結婚」と「同性婚」の価値「戦争」、「進化生物学理論」と「デザイン理論」、伝統的な教育手法(3R=読み書き計算=と人格開発)と「OBE(結果重視教育)」教育手法の文化「戦争」、例えば民主党と共和・保守党を分かつ異なる政治哲学の文化「戦争」、これらすべて行き着くところは、神の存在の有無の問題である。神は存在するという議論と、「神は存在しない」という議論は哲学だけでなく、事実上社会生活のあらゆる局面を規定するようになったときえ言えるかも知れない。「文化共産主義」あるいは「社会主義」(5)の社会学的現象はこの問題をクローズアップしている。重要なことは、われわれの社会とわれわれの生き方、また世界の将来は、まさに、神はありやなしやの問題にいかに答えるかにかかっている。

科学からの新たな証拠

いわゆる「人間原理」(6)は、物理学や生物学の最新の発見だけでなく、(7)神の存在の問題全体を完全に新しい立脚地におくことに成功した。哲学は近年、しばしば防御に追われてきた。とりわけ言語分析として知られる哲学分野でしばしばなされたように、哲学自体の「言語学的」省察にとらわれたときにはそういえる。しかし、いまや、新たな哲学的アプローチと洞察、そして新しい科学的データによって力を得て、哲学は再び攻勢に出つつある。かつて有名な無神論者でいまは有神論者になったアントニー・フルー(8)と原理講論(9)と統一思想(10)によって提起された新たな議論の一部についてとくにそれがいえる。神の存在の問題は新たな活力を得ている。このような新たな流れの中で、統一世界観は、神は存在するという議論を支持する新たな洞察を我々に提供してきた。ジョン・ヒックがいみじくも状況を説明しているように。

我々が十分に総合的な範囲のデータ、つまり生物学的進化の目的論的性格だけでなく人間の宗教的、道徳的、美的、認知的経験も含めたものを考慮に入れるなら、神は存在しないより存在する方が累積的にありうることとなってくる。(11)

ヒックの「神は存在しないより存在する方が累積的にありうることになってくる」というコメントは、伝統的な知的な議論がますます抑えきれない性格を帯びてくることを示している。しかしながらその新たな力を得たとしても、議論が基調として理性的であることを考えると、この努力には依然として何か不足している。私の考えでは、神の存在の「道

徳的」証明とレッテルを貼られたものについて考える方がはるかに説得力がある。人類は単に理性的存在ではなく、もっと重要なことは感情的存在であることだ。単に理性的な思考より、感情は、はるかに我々を「動かす」。かくして私は神の道徳的証明は現代においてとくに強力であると申し上げたい。とりわけ現代科学の見解や哲学からもたらされる説得力のある理性的結論の一部と組み合わせられることが大きな理由だ。

このエッセイでは、これらの新たな科学的、哲学的問題の一部を取り上げたい。そして、神への信仰を支持する「道徳的議論」とこれまで呼ばれてきたものに、あらたな視点を提供したい。この議論は哲学者イマヌエル・カントによって有名になったもので、しばしば彼と関連づけてられている。要するに、この議論は「人間の道徳的性格と価値観に基づいている」。(12)

この議論はいくつかの視点から述べられている。

第一のアプローチは人間の良心や責任感、義務感に基づいている。人間がもし単なる自然の一局面であるなら、自然の法に従え、あるいはそこから離れるという命令は無意味となる。義務感の時として生きる意志を否定するところに導く。人間の義務感はその根源や保証者としての神を暗示する。

再び、道徳的善と幸福は、合理的公正な世界では手を携えるべきだと言われる。つまり、道徳的に善なる人間は幸福であるべきである、さらに悪なる人間は不幸であるべきである。しかし我々が目にするごとく、そのような正しい釣り合いは存在しない。従って、最後に知的存在と正義と動機の純粋性を支持するために、神が存在しなければならない。

道徳的議論の3番目の形は、価値の客観性に基づくものだ。人間と人間の価値は自然のプロセスの一部である。人間と人間の道徳的基準は進化のプロセスから派生し、その表現である。生存と強化への助けとなる。(13)

道徳的議論の分析をいくつかの単純な真理から始めよう。

我々が取りうる、あるいは取るかもしれない行動

仮定の話だが、個人が社会に飛びこむ際、その個人はいかなる方法で行動しようと自由である。彼あるいは彼女は次のような選択が可能となるだろう。誰かを殺す、車を運転する、反戦抗議活動に携わる、あるいは献身的な慈善行為を行うこともできる。実際これらすべての行動は、2011年の最初の6カ月に実行されたものだ。明らかにすべて大変異なる行動だ。一部の人間が他でもない一つの行動方針を選択するのはなぜだろう。

それは確かにに一定の行動を取ることが、違う行動を取るより、個人的にもっと価値があるからである。しかし、もっと重要なことは、ほとんどの人が、他の行動に反して一定の行動を取る「責任」感を感じるという点だ。平均的には、誰かを実際に殺そうと思うよりも、慈善的行為を行う、あるいは運転をする責任感をもっと感じる。この責任感はどこから来るのだろうか。

道徳議論はいろいろな形を取るが、人間の倫理的経験、とくに仲間の人間に対する不可分の責任感は見方によってはその根源と基礎として神の存在を前提とする。

(14)

われわれはしばしば「義務」に対する強い経験を感じる。それは実際回避することはできない。われわれはほかの行動に反して、ある別の行動を取る「べき」だと考える。我々がすべきだと感じた行動を実行できなければ、良心に問題を抱えることになる。

それを無視して欲するところを単に行うべきではないのはなぜだろうか。何が我々に一定の行動を取らせ、ほかの種類は避けるように促すのだろうか。何によって良心の激しい痛みを感じるか否かどうい違いができてくるのだろうか。このことは人生をいかに生きることができるかについてとてつもない違いをもたらす。良心が深くさいなまれているなら、残りの人生すべてに影響を与えるだろう。うまくいかなくなる。夜眠れなくなり、何をしようとも平穏な心を経験することができなくなる。何もなければのように装い、しばらく無視することはできる。しかし人生のある時点で、圧倒してきて、もはや避けることができなくなる。良心の力が我々の中に存在することは非常に明白なことだ。時として恐るべき力となる。自分の良心に明らかに背いて生きることができるように見える人は確かにいる。正邪、善悪の区別の未発達を示すものかもしれない。このように良心と価値は関係し合っている。にもかかわらず、生涯にわたり否定したとしても、往々にして死ぬ前になると、痛んだ良心と仲直りをするものだ。「知識」あるいは「悩める良心」を墓まで持って行きたくないのだ。良心を蹂躪する行動は、決して逃れることができない代物のようだ。この事実は心に留め置かなければならない。しかし、再び問えば、良心が我々を悩ますか悩まさないかはどのような違いをもたらすのだろうか。それは人生の本質的な部分であるかもしれない。

ほとんどの内省的人は、殺人、だまし、嘘といった行動は単に「間違っている」ことを腹の底で感じ、直感し、知っている。そこには二つの道はないのだ。そのような道徳的考察が、「善」なる行動の基礎の存在について我々に何かを教えるのだろうか。さらにはこの考察が、神の存在の有無について何かを語りかけるのだろうか。そのような道徳的考察が、神の存在の証明となりうるものだろうか。なりうると思う人もいる。それが神への信仰を支持する道徳議論を展開する動機となっている。

もっと哲学的に言えば、そのような考察は、単に個人的で、主観的、さらに、あるいは

感情的なものであろうか。そこには有効な客観的基準、つまり私の良心から離れて実際に「そこにある」何ものかは存在するのだろうか。私もしくは我々が道徳的、倫理的思考と行動において従う「べき」ものがあるのだろうか。そのとおり、あるのだ。以下の論述において私は道徳的倫理的基準の客観的基準は家庭であると主張したい。従ってそれらの考察は単に個人的で主観的で感情的なものではない。個人的、主観的なものには全く別の異なる側面が存在する。それは家庭という文脈である。とはいっても、これらは緊密に関係しており、実際の生活では決して分離できない、そしてこの事実は大変重要であると言いたい。しかしまずは哲学者イマヌエル・カントによって提起された伝統的な道徳的議論について考えたい。

神への信仰のための道徳的議論

イマヌエル・カント（1724-1804）は相当重要な哲学者である。彼は神の存在は実践理性の行使によって示されうると主張した。ところで実践理性は普通の、いわゆる「純粹」理性とどこが違うのであろうか。カントの議論を検討しなければならない。

カントは三つの概念を叙述した。神と自由と永遠性である。三つとも道徳的生活には必要である。つまり、道徳的に生きるためには、神がいなければならないし、実践するための純然たる自由がなければならない。そして人類は不滅でなければならない。再び、カントは神の存在は「実践理性」の行使によって示されうると論ずる。ジョン・ヒックは次のように述べている。

神の永遠性も存在も道徳的生活の前提条件である。それは、つまり、義務を無条件の要請として彼の上に正当におかれるもの考えるものによって、前提条件として肯定されうるとの信念である。（15）

カントは議論においてきわめて明瞭であった。「我々の道徳的価値が実在の性質や目的について何かを語るか（すなわち宗教的信念の芽を与える）か、またはそれらは主観的であって従って無意味なものであるか、である」。カントを解説しながら、ジョン・ヒック次のようには説明している。（16）

もし、我々が、道徳律と意思の目的である最高善（*summum bonum*）、つまり完全な幸福の存在を認めれば、道徳律と最高善の必要な関係を維持するため、神の存在を結論することが必要になる。同様に、人間の生命は短かすぎ、人間の目標を達成するために無制限の時間を与えるため、魂の永遠性を前提とすることが必要となる」（17）

カントが言っていることは、神の存在を仮定することが道徳的に必要だ、ということだ。(18) これは論理学で見いだすかも知れない「論理的」必然性とは対照的である。さらに「永遠性への信仰は神への信仰と緊密に関係している」。(19) 神を信じ不滅性を信じなければ、真に道徳的ではありえない。この議論は、神の存在を支持する道徳的議論を構成する。

もちろん、一連の議論には批判もある。非信仰者にとっては、これは循環論である。(20) 循環論であれば、ほとんど重みはない。ある人間に、神は存在することを説得し、証明しようとする不毛な努力の域を出るものではない。カントの時代、人々は人間の道徳的性格は当然のこととして認める傾向にあった。(21) この人々の傾向は道徳的議論に資するものであった。しかし、今日は全く状況を異にしている。今日、人々はますます人間以下の態度で行動する。真の父・文鮮明師は次のように述べている。

私たちが今日住んでいる世界をごらんください。世界の人々は極端な利己主義の罠に捕らわれ、物質的利益を要求しています。彼らは価値観をすべて失い、自己の欲望充足と劣化の深みに陥っています。世界はアル中で溢れています。あたかも麻薬とフリーセックスでは十分ではないかのように、動物世界でさえも見られない近親相姦を犯しながら、依然として(恥じることなく)頭を上げて生きているものもいます。祖母、母、妻、娘を蹂躪したあとも人間の顔をした野獣が自由にうろついています。配偶者を交換するスワッピングが盛んになっています。このような状況は疑いなく、道徳破壊の絶頂であり、墮落行為の最終的姿です。(22) (下線は筆者)

悲劇的な意味で、カントの道徳的議論は、かつてなくいつそう説得力ある道徳的トーンあるいは「緊急性」のトーンと言うべきかもしれないを帯びている。このようなことはカント自身想像だにできなかったことだ！露骨で時には信じがたい残酷性を見せる今日の犯罪を考慮すれば、神の存在を支持する道徳的議論はカントの時代より一層重要性を持ってきている。道徳的議論に真実性がいくばくかでもあれば、人類は神に対して恐るべき罪を犯していることになる。真の父が述べられているように「何千年にもわたり人類はそのようなみだらな行為、神の胸に釘を打ち込む背信行為を犯し続けてきたのです」。

(23) 我々はかつてそのようなことに気づいたことはない。このことが、神への信仰を支持する道徳的議論がかつてない緊急性を帯びている所以だ。純粹に理性的で知性に語りかける他の議論をはるかに超える、少なくともそうあろうとすることによって、道徳的議論は我々の心に語りかけてくる。

カントの思想のもう一つの側面を考えてみたい。それも道徳的議論と関係している。カントは、人間は二つの世界に住んでおり、それは「ある(is)」の世界と「べき(ought)」の世界だ。有名な「ある／べき(is-ought)」問題だ。現実是我々に付与されたものである。例えば貧困と飢えが「ある」、戦争と紛争が「ある」、毎日永続する不正義が「ある」。悲し

み、頭痛、悲劇がすべて我々の周りに「ある」。「ある」の世界に向かい合うとき、我々は、振り返り、内的に葛藤せざるを得ない。貧困はある「べき」ではない。戦争はある「べき」ではない。（ニクソン時代のベトナム反戦家もこのような感覚を持っており、それを大変強く感じた。アフガニスタンやイランでの戦争に反対する者も同じ感覚を持っている。）われわれは正義である「べき」だと感じ、この世界に悲しみ、頭痛、悲劇はある「べき」ではない、と感じる。明らかに、人々が経験する二つの異なる世界が存在する。いずれの経験も強烈である。そしてこのような経験は全ての境界を超えている。民主党員も共和党員も、無視論者も有神論者も、活動家も平和主義者などすべての境界を超える。ただし、現実がどうある「べき」かについてのわれわれの解釈は、それぞれ違うかもしれない。時には全く異なっているだろう。しかし誰も、人々が感じる「ある」とある「べき」の二分を感じるという事実をないがしろにすることはできない。これがカントの内なる「道徳律」に対する畏れであり、「上なる星の輝く空」から感じる畏れと対照的なものである。現代のカント解釈者の一人、ゲッデス・マクレガーを引用する。

「二つのものが」とカントは有名な一節で宣言する。

「もっと頻繁にもっと確かに内省するほどに。私の心を、常に新しくますます強くなる感嘆と畏敬の念で満たす。それは上なる星の輝く空と内なる道徳律だ」カントは道徳的事実に深く印象づけられた人々の中に一人だった。原子や電子の世界に、いかなる自由やあるいは自由の欠落が見いだされようとも、人間の内的生命の中には自由がある。私は他の道ではなくこの一連の行動を選ぶ。（24）

我々が住む世界は明らか二つの異なる世界がある。一つは自由があり、もう一つにはない。一つの世界では、私は自由に選択できる。私は、クラシックの音楽を聴きたいのだろうか、それともアメリカの50、60年代の「黄金のオールディーズ」を聴きたいのだろうか。私はここで選択をしている。価値の中で一つを選ぼうとしている。二つの世界という明らかな現実から何をつくり出そうとしているのだろうか。これらの世界は明確に異なる世界なのだろうか。全く関係がないのだろうか。それともつながりがあるのだろうか。ある方法で結ばれているのだろうか。この質問は重要な意味を持つ。とりわけ、神の存在の道徳的証明においては。

議論のため、この二つの世界が事実、互いに関連しあっていることを認めよう。個々人は二つの経験をすることができるので、何らかの関係があると考えるのは非理性的なことではあるまい。私の（我々の）経験は、何らかの形で相互に関連しあっている。なぜならそれらは私の（我々の）経験であるからだ。もしこれら二つの世界が何らかの形で相互に関連しあっていれば、我々の道徳的知識は知識としてはテーブルや椅子の知識と本質的に違いはないことを意味する。（25）我々の道徳的知識には現実味がある。そのような論述の意味合いは何だろうか。カントに戻ろう。

カントにとって、道徳秩序（あなたは～べきである）は我々に無制限の主権を要求する。それは礼儀はなく、政治的に正しくもない。その「べき」は要求、命令として我々に迫る。そこに選択の余地はない。それは絶対的だ。この力は我々の良心から来る。人々はある種の責任感を経験することを覚えていますか。道徳的主張は、なすべきなら、できる、ということだ。何かをす「べき」だとすれば、それはできるという強い意味が込められている。ナポレオン・リッチが著書「考えて豊かに育て」で述べた有名な言葉、「人間の心が認識でき信じることができれば、達成できる」（26）のように。

神は道徳的生活の三つの前提の一つである。ほかの二つは自由と永遠性である。神の存在を前提とすることなしに、道徳的秩序（「ought」）と自然秩序（「is」）を結びつけることは不可能となるだろう。二つの領域は分離されたままとなり、大変多くの人が不幸になることだろう。ベトナム戦争時代の反戦活動家は永遠に欲求不満を抱えなければならないだろう。彼らは戦争を望まないかもしれない、戦争がある「べき」ではないと思っているかもしれない。しかし彼らの主観的感情や信念は何の実質的意味を持たない。戦争が「あり」、なにもこの事実を変えることはできない。ではなぜ彼らは抗議しているのか。彼らは変化を生み出すことが<<できる>>と信じているに違いない！自己欺瞞なのか。誰か彼らに言ってやらなければならない！カントの伝統的言葉で、「客観的につまり自分とは独立し本質的善なる存在者から力を得ていなければ、道徳律がいかにしてそのような要求を持って私に迫るのか、そのような力を持って私に臨むのか」（27）。以前述べたように、

理にかなない正義の世界で道徳的善と幸福は手を携えていくべきだと言われる。つまり、道徳的に善なる人は幸福であるべきで、悪なる人は不幸であるべきだ。しかし、我々が見るとおり、そのような正しいバランスはない。従って、最終的に知性と正義と動機の純粋性を支持する神がいなければならない。」（28）

有名な話だがカントが支持したこの「当為性」（ought-ness）の容赦なき感覚は我々にカントの言葉で「定言命法」として我々に迫る。カントの言葉を引用する。

人間には義務感がある。「私は～すべきだ」という道徳律は、先験的に、人間の最も深奥の性質から由来する。道徳律は理性によって治められる意志である。一つ重要なことは人間は善を意志すべきだということだ。

意志と動機が単なる欲望ではなく、理性によって支配されれば、その意志は<<絶対的<<無条件であり、例外を許さない。>>それが道徳律、すなわち「定言命法」である。（29）（強調表示は筆者）

再び、全き責任感、道徳的責任感について何が言えるのだろうか。我々が無視し、避け、

間違いなく蹂躪している容赦なき命令は、我々の心理的危機に際してのものだけなのだろうか。いえることは良心の力、「当為 (ought)」の力は絶対的であるということだ。それが「定言命法」である。

客観的基準は存在する：家族

上述したように、哲学的視点から、道徳的行為の考察は、単に個人的で主観的で感情的なものではない。カントの「当為」観と彼の語った定言命法は、両方とも何の明確な脈絡もなく孤立した概念として論じられている。これは彼の議論の弱点である。というのは我々が道徳的倫理的思想と行動において従う「べき」、明確で有効な客観的基準が存在するからである。すべての道徳的倫理的基準の客観的尺度は家族である。神の存在を論じたカントと他の哲学者は、すべて、道徳的行動の問題を個人の視点から論述した。これはこれまで西洋哲学の一般的特徴であった。過去の哲学者は重要で必要でさえある個人が持つより広い社会的とりわけ家族とのつながりを考察することはあってもごく稀であった。このことは非常に重要である。なぜなら、家族を考察することは、我々の考えを変え、個人的なまた個の問題をより大きなより実質的で客観的な家族という基礎に置いたからである。すべての人間は父母を通して家族の中で生まれる。家族の考察は単に個人的、主観的、感情的なものではない。家族の文脈は、すべての議論を全く新しい異なるレベルに広げた。私はこれらの、個人的、家庭的次元が密接に関係していることを論じたい。さらに、現代物理学と生物学についてひろがりつつある世界的見解に基づいた圧倒的な議論は、自然には目的とデザインがあるというものだ。個々人が、たんに個人であることを超えたより大きな目的をもたないという合理的理由はあるだろうか。カール・マルクスさえも、ユダヤ人の家族の中で成長し、その文脈の中で、彼の思想と決意が形成された。ただそれは否定的形であったが。

良心の重要性

我々は単に我々が選ぶ道を生きていくことができるわけではない。個人はあまりにも親密に家族と結びついており、家族が道徳性とりわけ倫理の重要な客観的尺度となりうることは正当化されよう。個人主義は神の存在を支持するすべての伝統的な道徳的議論の弱点であった。個人あるいは個人の感情や理性をベースに論じようとした。その個人は現実には家族と親密に科結びついている。重要なことだが、「個人」というものは存在しない。しかし、同時に、過去常に向き合ったもう一つの問題は、家族という一貫した概念があったためしがないということだ。この点は統一原理と統一思想の世界観の強みである。家族という概念が統一思考では終始一貫しており、よく開発されている。

個人がいろいろな関係を見いだすのは、家族の文脈においてである。さらに重要なこと

は、「四大心情圏」や「三大王圏」について語るができるということだ。(30) これらは明らかに統一原理と統一思想によって提示された重要な概念である。再び述べるが、道徳と倫理が付与された必然的要素が家族という文脈の中で一貫して論じられたことはない。統一思想においては家族という客観的尺度があるため、「道徳性」の概念や尺度は極めて明確に示される。(31) さらに「倫理」の概念も、「単なる」倫理ではなく「家族」倫理という健全で一貫したベースの上に置かれている。

このように家族という文脈で強力な一貫した道徳概念があれば、神の存在を支持する道徳的議論によって生み出された伝統的概念を、さらなる一貫性をもって理解できる。我々が感ずる責任感、定言命法で経験する良心の力、「当為」観などすべて統一主義の一貫した世界観のなかにおいて強力な基礎を与えられよう。

しかし最後に、結局のところ、我々のすべての道徳的思考のついて明快な概念と、一層客観的基準を得たとしても、それで何が変わるのだろうか。それは最終的に神の存在を証明するのだろうか。いや、そうではない。上述したように、神の存在は、全ての人々がすぐさま説得されるような方法では証明され得ないであろう。ジョン・ヒックはデータの広がりにより神の存在が「累積的にもっとあり得ることになる」(32)と指摘したが、ありうることは証明と同じではない。にもかかわらず、議論において大変な違いをもたらす。理性的に説得力のある一貫した議論によって強化されより広い文脈に置かれるようになる。これをよりわかりやすくするために、神の道徳的存在証明の伝統的要素と関連づけて、家族についての統一主義の概念について説明したい。この概念の中心は良心だ。

家族と良心は大変重要で関連した概念

良心の力は家族において養われる。家族の中で四大心情圏を見いだす。子供の心情、兄弟姉妹の心情、夫婦の心情、そひて父母の心情。(33) 真の父は語る。

そのような家庭において、神は我々の良心の縦的な主体となり、縦的に行動する。その縦的な主体に従うあなたの心は、自分自身に対して縦的な主体の立場に立つ。そして自分の心と体を統一する。そこに父母の愛、夫婦の愛、子女の愛、兄弟愛が宿る。つまり四大愛、四大心情圏が完成する。(34)

子供の良心は、子女の心情圏の期間に育まれる。この心情圏の完成のために寛容なことは、純潔である。純潔が守られれば、道徳的、倫理的価値は *inculcated* され、子供の良心の力は成長し育まれる。両親から善悪や正邪の区別を教えられ学ぶ。このように育まれた良心は、道徳的羅針盤の働きをするようになる。ますますその働きが強まり、残りの三つの心情圏を導くようになる。つまり、倫理行動は内的な良心によって治められる、言い換えれば、倫理行動は、道徳性の基準によって導かれる。上述の引用にもあるように、「神」

はこの家族体系の中で統合的次元に立つ。もし家族が壊れると、あるいは弱まると、重要な道徳的発展の「プロセス」の効果が減退する。

いくつかの歴史的省察と神について考える精神「環境」

私は上述した中で、イマヌエル・カントの「ポスト・ルネサンス」においては、人々は人間の道徳的性格を一般的に当然のことと認める傾向にあった、と指摘した。「近代性の酸」が多く伝統的（宗教的）考えとりわけ伝統的宗教的感情に対して自分たちの仕事をした。哲学者は仕事に戻り、いまやもっと合理志向になった信仰に理性的ベースを提供するように努めた。それは「信仰なき」時代ではなかった。しかし初期の教父時代に存在した「信仰」と同じではあり得なかった。そのような信仰姿勢を「紳士の信仰」と呼んでもいいかもしれない。ドイツの神学者フリードリッヒ・シュライアマッハーの言葉を借りれば、誰も「さげすみ」はしなかった。カントの時代は、道徳性は社会の大きな関心事であった。家族は一般的に尊重され、人々はもっと自然に互いの社会的繋がりを感じていた。もちろん例外もあったであろう。しかし一般的には道徳性、倫理、家族、その他の社会的概念は程度の差こそあれ、当たり前のことと考えられていた。このようなことを述べるのは、まさにこのような社会環境、「精神的雰囲気」の中で、神の存在の信仰はひどく非難はされることはなかった。少なくとも、現代の非難の程度には及ばなかった。家族と社会的絆があるかぎり、神はほとんどの人々にとってある程度意味深い存在であった。

このことを申し上げるのは、今日の世界における家族制度の悲慘な立場を考えれば、あらゆる種類の道徳的倫理的基準とともに道徳的倫理的悪があり、神はいるのかと親告に問われても不思議ではない。そのことが、今度は懐疑主義者に、神の存在を示すベースとなるあらゆる道徳概念に反撃することを可能にしている。事実、今日のすさまじい悪の現実を見れば、かえってそのことが神の存在を否定する論拠となっている。

半面、家族制度が強力であれば、神の存在を支持する道徳的論議はかつてなく概念を強化され、新しい次元に引き上げられる。なぜなら、上述したように、だれもと道徳的証明の要素を家族の文脈と結びつけて考えようとはしなかったからだ。ただ常に個人において論じられてきた。さらに、いかなる個人も、自分たちが育まれた家族の教育と同程度に道徳的で倫理的である。

家族が客観的現実である

教えが、家族という論理的で一貫した概念を含んでおり、命令者の良心の力を感じさせれば、真の愛に生き、家族のためにそうしたいと鼓舞し、このことが家族に堅固で理論的で客観的な哲学上のベースを与える。上述したことで明らかなように、統一主義により、新たな客観的な現実としての家族が、神を考える適切な基礎となり、そして神の存在の道

徳的証明を結果的に促進していくことになる。

価値観（35）の文脈で統一主義の家庭観、良心観を考えれば、論理的で一貫し実際的な概念であるだけでなく、絶対不可欠の概念でもあることが分かる。誰も無視ができない。この文脈で、神の存在の道徳的証明は、新たな理性的な力を得る。それは実際に神の存在を「証明」しているだろうか。いいえ。それは圧倒する、ないしは、説得するものか。それは別の問題で、重要なものだ。簡単には答えられない。アントニー・フルーは「証明することと説得すること」の違いを明らかにしている。（36）神の存在を実際に証明するのは不可能かも知れない。しかし十分な説得力をもって、論議をすれば、すべての理性的な人間なら、深刻に受け止めるに違いない。ただし、「思想的斧（おの）」を研いでいないかぎりの話だ。原理的に神の存在に反対する人に対して、思考を変え少なくとも可能性だけでも受け入れるように、言えることはほとんどない。

道徳的議論の新たな地平線

神の存在を証明する真に論理的証明はないのかもしれない。しかしカントの道徳論議をより広い文脈におくことは、彼の論議全体に、概念上多大な明瞭さを加えることになる。家庭の四位基台という概念が出てきたために、神が存在するというベースとして真に道徳的な（そして客観的には倫理的な）価値を否定することは哲学的にますます困難になってきた。概念と論議をこの新たな文脈（家族）に置くことにより、我々は、神は「家庭」倫理の基礎として存在すると論じることのできる、より多くの概念的、組織的、哲学的資源を提供してきた。人間が育まれるのはまさに家庭という文脈であり（カントの「ある」要因）、そこから倫理的道徳的視点を獲得する（カントの「べき」要因）。私は別のところで、家庭は非常に大事である、と言ってきた。それは単に倫理的立場からだけでなく、認識論の立場からでもある。（37）つまり、人間は家庭の中に神を実際に「見る」、あるいは「認識する」ことができる、ということだ。

前に議論したように、皆、ある種の道徳感性を持ち、イラン戦争に反対（ここでは何の戦争でもかまわない）するものも例外ではない。良心の力や道徳的責任、「べき」感などはある一貫した説明を与えられるべきで、家庭以上により理由付けはあるだろうか。統一主義では神中心の家庭、つまり理想家庭について語る。そのような家庭の基礎、論理的根拠として神は存在しなければならない、という力強い議論だ。特に神の存在の道徳的証明を考えるなら、さらに新たな力を得ると思う。さらに広い文脈の中で眺めると、いっそう力を増そう。とりわけ統一主義の教えがどこから来たのだろうか、について考えることが重要だ。

さらなる二つの考察：教えと教えの背後にいる人物

統一思想の中の家庭観は、統一原理の説明に由来する。(38) 統一原理は統一運動の基本の神学テキストである。しかしいろいろな面で、このような教えが由来した人間の現実がいっそう際だっている。最初に彼の教えの性格を検討してみたい。

論議の背後にある教え

既述したように、統一原理は文鮮明師の基本的教えを表現したものだ。基本の本だけでなく、彼の数多くのスピーチが半世紀以上にわたって話されている。彼の思想の目立った特徴は、一貫性である。一方で最近の有名な二人の神学者、初期バルトや初期ティリヒについて語ることもできるかもしれない。次に後期バルト、後期ティリヒについて語り続ける。時間がたつにつれ、神学者の心が変わり、考えも変わり、全く新しい思考方法に入っていくことが示される。

それとは全く対照的に、文鮮明師の思想は生涯を通して変わっていない。彼の思想の中でも家庭の重要性を強調するものだ。かくして、教えは新たな理解へと導く。それは総合的で、不変の世界観だ。その文脈の中で、カントの、より「個人志向」の観念は、はるかに一貫した意味を帯びてくる。それは、なぜ定言命法が我らの内にあるか、要求しているかの論理的理由を評価できるからだ。

カントの理想を家庭の文脈で考えるなら、神の存在を支持する道徳の力はさらに力を増す。それはさらに説得力のあるテノールで、以前持っていたとは思えないものだ。依然として我々は、神の存在を証明できない。ノーだ。しかしここで説明した概略は、もっと強い、アントニー・フルーの言葉を使えば、本当に神はいると思わせる「説得力」を与えるかもしれない。

教えの背後にいる人物

確かに、教えは本当に雄弁で一貫し、神の存在を支持する道徳的議論をさらに大きな説得力を持って面白くしている。しかしもう一つ考えること、ユニークなことがある。哲学の全歴史上、あらゆる偉大な教えの背後には偉大な人物や思想家がいた。文師の教えは道徳的力がある。しかし私はその力、道徳的権威は、教えの背後に、あらゆる点から見て、まさにその教えの生ける体現者がいるように見えるといことによって強化されている。あらゆる意味で、イエスの人物像を思い浮かべよう。イエスの教えは「権威」があった。同じく文師の教えにもある。何世紀にもわたりイエスの教えが世界に及ぼしたインパクトを見れば、真の父が将来の世代に対して、また将来の哲学的考察に対して、どんなインパクトを与えるか誰が想像できるだろうか。かくして、神の存在を支持する道徳的議論にもう一つのレベルを加えたい。それは、文師自身が、神への信仰の生ける証であるという事実だ。

文師が送った人生について考えるなら、彼の理想の偉大さはいっそう大きな重要性を持つ。

神の存在の理性的証明は、アキナスの五つの証明のように、一定の固有の論理を持っている。しかし個々ではあまり成功していない。それらを合わせても、論理的、理性的な心にはある程度のアピールをするかもしれない。とくにすでに神を信じている人にとってはそれが言える。しかしそれが彼らの議論の限界だ。それは単に、論理的で理性的な、神の存在「証明」である。人間として、我々は単なる知的な存在をはるかに上回るものである。我々は感情的で、道徳的な存在である。

道徳的議論は、他のもっと「伝統的な」証明がそうであったように、合理性に限定されているわけではない。それは我々の感情、直感、正義感にアピールしうるものだ。単なる理性的な議論の論理から離れた、道徳的視点から見ると、文師のケースは際だっており、奇跡的でさえある。単なる哲学者をはるかに超えて、神への信仰の生きた証として立っている。そして、驚くべき体系をもって彼から出てくる一貫した教えは、「そのこと故に」考察に入れられる「べき」だろう。彼の生き様は卓越している。文師自身が証言している。

私の場合も、天の道を歩むことを決意した日から、私のモットーとしてこれを守
ことを決心しました。「宇宙主管を願う前に堅く自己主管せよ」

神はこの目標を達成するため、導き手として神は良心をあなたに与えたのです。…
もし、良心を神の位置に置いて…あなたが心と体の共鳴圏を確立し、調和的統一を
完成することを、確信します。(39)

私は、すべての生涯を他のために生きる道を教えるために捧げてきました。これは
真の愛の実践です。原則として、それは個人だけでなく、家庭、社会、国家のすべ
でのレベルで適用されるのです。(40)

しかしながら、レバレンド・ムーンの生涯は、真の父母の使命を全うしなければな
りませんが、形容しがたい苦しみと迫害によって刻印された、悲しみの生涯でした。
(41)

神の宇宙創造のプロセスにも似て、彼の生涯は人類再創造の偉大な仕事に携わって
きました。そこではどんな小さな誤りも許されません。誰にも理解されない孤独な
道でした。荒野の茨の道をたどり完全に孤独な道を行かねばなりませんでした。
(42)

それは荒野を渡る旅でした。地上に住む 65 億の誰も理解できない荒野です。6 回に
わたる監獄生活の苦勞も耐えながら、摂理の鍵を放棄することは絶対しませんでした。
そのような私の人生でした。(43)

地上の誰がレバレンド・ムーンの生涯を理解できるのでしょうか。惨めな人生です。
自分の舌をかみながら神を慰めるために、また死亡圏で呻吟する墮落した人間を救
うために耐えてきました。いまも、誰かが私の心をのぞき同情の一言をかけるなら、

私は号泣し、涙は滝のように流れるでしょう。(44)

何がそのような決意の源泉なのだろうか。なぜそんなに不屈の確信がもてたのだろうか。文師は証言する。「生死の境を何度もさまよいながら、血を吐き出しながらも、なお神との約束を守るために不死鳥のように立ち上がらねばなりませんでした」(45)(下線筆者)だから今日がある。この人物は神を深く信じ、神を親しく知り、その現実の証として、生涯を生きることの必要性を感じ、結果として、とてつもない、ほとんどの人の想像を絶する苦しみを味わった。しかし、その苦しみの人生が、信じがたいほどに総合的で論理的な教えとなった。文師の言葉を引用する。

なぜ天が、皆様の前に立つ男、レバレンド・ムーンを人類の真の父母として任命し、新たな時代を開いたかいくつかの明らかな理由があります。

第1に他のために生きることを実践することに成功しました…

第2にすべての生涯を、すべての障害を克服し、勝利的基台をつくることに捧げました。真の愛を実践することによって提供される教育を通じて、神と人類の親子の関係を回復し打ち立てるため必要なあらゆる条件を満たしました。(46)

(下線筆者)

確かに、宗教的指導者たちは、しばしば苦しみを経験する。それは何も目新しいことでも、目を見張ることでもない。イエスの生涯が模範であろう。しかし文師に際だったことは、生涯経験したあらゆる苦しみと迫害にもかかわらず、依然として生きており活発であるということだ。生きて活発であるだけでなく、彼は成功しているのだ。故ヨハネ・パウロ2世やビリー・グラハム師と比べざるをえないのだが、二人は高齢になると急激に衰えて、公的仕事から身を引いた。文師は高齢であっても全く逆のことをしてきた。成功しているだけでなく、存在と、影響力において成長しているのだ。もちろん、これらの事実は、神自体を支持する道徳的議論の論理的力に何も加えはしない。しかし確かに彼らの「道徳的」パワーに力を加えるだろう。懐疑主義の世界に対する適切な反応は次のようにある「べき」だ。この人物は誰なのか、そしてどうして今やっているようなことができるのか。

純粋に哲学的レベルでは、読者に、アントニー・フルーの神を支持する素晴らしい議論を紹介したい。彼の著書「神はいる」(47)の中で、哲学的論証における新たな進展だけでなく、物理や生物学など科学の最新の発見を活用している。これらの発見は、宇宙の背後に「サムシング」「知性ある精神」あるいは「無限の知性」が存在するという信念をある程度支えるものである。そのような理にかなった信仰が定着し、哲学的に洗練されてくれば、さほど大きなステップを踏まなくとも次のレベルに到達するだろう。文師が教えたような心情の神への信仰である。文師を研究すると、彼の教えは単に「論理的」であることを超えて、もっと大きな力を帯びてくる。その教えは「神の存在を支持する道徳的議論」

として適切な役割を果たすことができよう。

Endnotes:

1. Frederick Copleston, *A History of Philosophy: Vol. 2 Medieval Philosophy, Part II*, New York: Doubleday & Company, Inc., Image Books, 1962, 277.
2. Copleston, *History*, 55-65. These "five proofs" are very well-known, but it is very evident today that they carry very little compulsion. Especially, if one considers these "proofs" individually they carry little weight. A good discussion of this latter point can be found in Geddes MacGregor, *Introduction to Religious Philosophy*, Boston: Houghton Mifflin Company, The Riverside Press, Cambridge, 1959.
3. John Hick, *Philosophy of Religion*, 2d ed., New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1973, 20.
4. See *The Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity, Exposition of the Divine Principle*, New York: HSA-UWC, 1996, 354-55, for a full explanation. See also, Joseph Stalin, *Dialectical and Historical Materialism*, New York, International Publishers, 1977, 5-46.
5. Sam Almeida, unpublished Master thesis from 2011, CheongShim Graduate School of Theology.
6. George Greenstein, *The Symbiotic Universe: Life and Mind in the Cosmos*, New York: William Morrow and Company, Inc., 1988, 46-7.
7. For some of the philosophic implications of the recent scientific thinking, see Antony Flew, *There Is A God: How the world's most notorious atheist changed his mind*, New York: HarperCollins Publishers, Harper One, 2008.
8. Flew, *God*.
9. HSA-UWC, *Exposition*.
10. Unification Thought Institute, *New Essentials of Unification Thought: Head-Wing Thought*, Tokyo, Japan: Kogensha, 2006.
11. Hick, *Philosophy*, 26, quoting from works by F. R. Tennant and Richard Taylor.
12. Harold H. Titus, *Living Issues in Philosophy*, 2d ed., New York: American Book Company, 1946, 406.
13. Titus, *Living Issues*, 406.
14. Hick, *Philosophy*, 28.
15. Hick, *Philosophy*, 29.
16. Hick, *Philosophy*, 29.
17. Geddes MacGregor, *Introduction to Religious Philosophy*, XXX, 115.

18. MacGregor, Religious Philosophy, 117.
19. Titus, Living Issues, 408.
20. MacGregor, Religious Philosophy, 117.
21. MacGregor, Religious Philosophy, 118.
22. Family Federation for World Peace and Unification, Messages of Peace, New York: PM 8, 109-10.
23. Family Federation, Messages, PM 8, 110.
24. MacGregor, Religious Philosophy, 113.
25. MacGregor, Religious Philosophy, 114.
26. Napoleon Hill, Think and Grow Rich, New York: Ballantine Books, a Fawcett Crest Book, 1960, 19-32.
27. MacGregor, Religious Philosophy, 117.
28. Titus, Living Issues, 406.
29. Titus, Living Issues, 373.
30. See Joong Hyun Park and Andrew Wilson, True Family Values, New York: HSA-UWC-, 1996, 72-112 for an extensive explanation of these important concepts.
They are central to the Unification worldview.
31. UTI, Exposition, 282-86.
32. Hick, Philosophy, 26.
33. Park, Wilson, True Family Values, 74-93.
34. Family Federation, Messages, PM 8, 115.
35. UTI, Essentials, 199-239.
36. Flew, There Is A God, 41.
37. See David A. Carlson, "Is it Possible for One to Achieve 'Cognition' of the Divine? or, Can We 'See God,? or, How Can We 'See' God?," in David A. Carlson, The Dawning of a New Culture: The Advent of a God-Centered World, CheongShim: GST University Press, 2008, 16-43. In this article, I lay forth an argument as to why the family can be considered as a legitimate objective reality. On that basis, the values and emotional modes of life as are manifested in the family become a legitimate objective basis for the "moral proof" for God's existence.
38. HSA-UWC, Exposition, 33-34. See also Family Federation for World Peace and Unification, True Family and World Peace, New York: HSA-UWC, 2000 for many speeches related to the ideal family.
39. Family Federation, Messages, PM 5, 74.
40. Family Federation, Messages, PM 9, 134.
41. Family Federation, Messages, PM 8, 112.

42. Family Federation, Messages, PM 8, 112.
43. Family Federation, Messages, PM 2, 32.
44. Family Federation, Messages, PM 9, 125.
45. Family Federation, Messages, PM 9, 124.
46. Family Federation, Messages, PM 11, 168-9.
47. Flew, There Is A God. The entire book is well-worth reading. It is short, only 158 pages, and written in a friendly style. Flew does refer to certain philosophical ideas, but does not get so esoteric that readers are unable to follow. Especially in his treatment of the latest findings in modern science, in physics and in biology, his book is very stimulating.

References Cited:

- Almeida, Sam. "The 'New Face' of Communism: A Study of Communist Strategy in the West: Ideological Subversion in Postmodern Period," thesis in Master of Theology, 2010, CheongShim Graduate School of Theology.
- Carlson, David A. "Is it Possible for One to Achieve 'Cognition' of the Divine? or, Can We 'See God,'? or, How Can We 'See' God?," in David A. Carlson, The Dawning of a New Culture: The Advent of a God-Centered World, CheongShim: GST University Press, 2008.
- Copleston, Frederick. A History of Philosophy: Vol. 2 Medieval Philosophy, Part II. New York: Doubleday & Company, Inc., Image Books, 1962.
- Family Federation for World Peace and Unification. Messages of Peace. New York: FFWPU, 2007.
- Family Federation for World Peace and Unification, True Family and World Peace, New York: HSA-UWC, 2000.
- Flew, Antony. There Is A God: How the world's most notorious atheist changed his Mind. New York: HarperCollins Publishers, Harper One, 2008.
- Greenstein, George. The Symbiotic Universe: Life and Mind in the Cosmos. New York: William Morrow and Company, Inc., 1988.
- Hick, John. Philosophy of Religion, 2d ed. New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1973.
- Hill, Napoleon. Think and Grow Rich. New York: Ballantine Books, a Fawcett Crest Book, 1960.
- The Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity. Exposition of the Divine Principle. New York: HSA-UWC, 1996.

MacGregor, Geddes. *Introduction to Religious Philosophy*. Boston: Houghton Mifflin Company, The Riverside Press, Cambridge, 1959.

Stalin, Joseph. *Dialectical and Historical Materialism*. New York: International Publishers, 1977, 5-46.

Titus, Harold H. *Living Issues in Philosophy*, 2d ed. New York: American Book Company, 1946.

Unification Thought Institute, *New Essentials of Unification Thought: Head-Wing Thought*, Tokyo, Japan: Kogensha, 2006.